# 西遊夢錄（二十五）

瀧川規一

## 蘇國の部

【インヴアネス市】 イヴアネス（Inverness）市は人口僅に二萬餘の物靜かな田舍町である。それでも蘇國高地々方の首府である。ゲーリツク文化の中心地である。年一回北蘇大會が此地で開かれる。大會の期間には種々の催物がある。ゲーリツク文化に關する學術講演會は勿論のこと音樂會や舞踏會が開かれる。運動競技の大會がある。時々は野外劇などもある。何れもゲーリツクの文化文藝が催物の骨子となつてゐる。ゲーリツク協會の本部もこの町にある。ゴツヅマンス・ウオーク（Godsman's Walk）の散歩路に行けば全市を下瞰し北の海を遙かに見渡す。山水の色は黑ずみ人間の白皙の顏色までも暗い心地がする北寒國の人々の顏色は益々白くして而かも暗い。熱帶の黑人國に入れば顏色益黑くして而かも明るい。眞夏に外套を被り冬着で目を送る。どうしたことか斯んな寒空の國に來ると熱國のことを連想する。

【クリナン・カネル】 オーバン港の滯留には陰晴の心地が相半した。再び船上の客となつてグラズゴ市まで南下することに決する。港に直面してゐるケララ（Kerrara）の低島は自然の防波堤を作つてゐる。船内には多くの乘客を見ない。甲板の上に只ひとりケララの島を眺めて立ち去るオーバンの港に名殘りを惜む。遺憾ながら會見の時機を得なかつたが噂の日本婦人は只一人オーバンの港に住んでゐる。時には故國の春を忍ぶ日もあらうにと想へば、よそごとながらうら淋しき心地がする。ベンチに悄然と坐し、左舷に見えるセイルの島（Seil）イーストデール（Eastdale）の連島、右舷に眺めるムル（Mull）の大島、さてはムル島の最高峰ベン・モール（Ben More）左岸遙かに雲表に聳ゆる二重の峰ベン・クルアカン（Ben Cruachan）を高く仰いでは只徒に大西洋の彼岸を空想する。やがて名も知らぬ小さき埠頭から船は一人の婦人客を拾ふ。島の低きは暗礁にあらずやと思はるる程に岩頭を僅に水面より露はして居る。大小の島々の連鎖を巧に船は切て進む。沿岸通ひの船であるが海鳥一つ來らず暗雲灰色にして波の色も亦灰色である。やがて雲散り空晴れ水色碧となることを覺えた頃には船はジユラ海峽（Sound of jura）の入口にて左に折れ、既にクリナン灣に入つて居る。灣内廣濶にして幾つかの山角海に突進し山角と山角との間は海峽をなし内埋

に深く浸入してゐる。埠頭に停船するや乘客一同は運河通ひの小船に移乘する。河の兩岸と船側との間隔は只僅に數尺である。而かも運河の進路は常に婉々灣曲してゐる。よくも船は岸に打ちつけぬもの哉と感心する。船體が大なる丈け操縱するは自轉車の曲乘り以上の手腕を要する。キンチア(Kintyre)の岬を迂回すれば七十哩の舟行になる。運河によれば僅に九哩である。運河を航行する船脚は非常に遲い。水閘にて船を上下せしめるまどろしさは迚も耐えられない。その間堤防上の道を運河に沿うて人々は三々伍々群をなして歩を運ぶ三人連れの米人らしき一行がある。諧謔談笑の聲高く傍若無人の態である。一人は肥大の大男で五十歳の坂を幾つか越したらしく見える。他は背高の痩男である。肥えた男が一行の長らしい。この男は米國マサチューセット控訴院の刑の執行猶豫局の長官であることが後に判つた。他の二人は屬僚である。彼等は意氣を紛らすべくお國自慢をはじめた。彼等の話題は國家の紋所の優劣論である「百合の花(Fleur de Lis)は佛蘭西の國の紋となつて居る。薊(Thistle)は蘇格蘭の紋である。シャムロック(Shamrock)と呼ばるるクロウバ(Clover)の葉は愛蘭を代表し、薔薇(Rose)は英蘭をあらはす。日本は菊か櫻か。何れにせよ各國は地上の草花をもつて國家の徽章(National emblem)としてゐる。然るに米國は世界を見下ろしてゐる星をもつて紋としてゐる。米國が世界の覇王となり盟主となる運命はこれによつても明である」と云ふのである。彼の談話轉じて詩人バーンズがエヂンバラ市に再度行つた時の話に移る。更に轉じて彼の住へるマサチューセットで年々バーンズの記念祭を催す時の話となる、「記念祭には各國の代表者が招かれる。席上バーンズに關する感想を述べ頌德の詩を朗讀することになつてゐる。支那人は立派な詩を作つて讀むが日本人に至つては一言隻句も云はない。」彼は斯く云つて突然余に向つて「お前が日本人なら聞くが、日本人は誰もバーンズのことを知らないのか。日本にはバーンズの詩を讀む人が無いのか。」と彼の質問は甚だ鋭い「日本人では英文學研究者ならば讀んで居る人がある」と答へると「必ず何かを書いて送れ」と云ふ。

脚の疲れを覺えた頃に再び船に戻る。運河の堤防上に村童四五人血相を變へて走つて居る。船と競走してゐるのである何れも十二三歳から八九歳に至るまでの小童である。乘客の一人が船から堤防に小錢を投げてやる。小供等は競爭して拾ふ小供等の脚力が衰へる頃にまた小錢が投げられる。拾はんとて走る小供等の顏は全く血色を失ひ息絶え絶えである。後れ馳せに走つてゐる最年少の小供は半ば泣き面をしてゐる。餘りの哀れさを見兼ねた客は落伍せんとするこの小童に向つて小錢を投げてやる。大抵は年長の小供等の爲に拾ひとられる件の裁判長も持ち金を小錢に悉々他人から換へて貰つて投げる。暫の間投げてゐたが、突然大聲で裁判長は云ふ「こゝに乘つて居る紳士淑女達のうちにも小供の時にはこの堤防の上をあのやうに走つた人も居るだらうな」甲板上の乘客は只苦笑するばかりで誰一人應酬する者が無い。運河の途中處々で

客を拾つたので小さき運河船は客を滿載してゐる。九哩の航程も何時の程か過ぎて運河の南端アルドリシェイグ（Ardrigaig）に着く。

【カイルズ・オヴ・ビュート】運河の小船を乘り棄てて暫蹴ふ間も無く他の船乘場に急ぐ。埠頭より半哩ばかりもの間三列の長蛇の陣を作つて船を待つ客が押し合つて居る。斯うした場合拔け驅けに後から來た者が前の者を押しのけたり割り込んだりすることを見受けない。外國人だからと云つて特別に讓つたり虛待したりしない。先着者から順次乘船せしめる巡査や係員が辭を枯らして群衆を制すると云ふが如き不體裁なことが無い。その點に於て歐洲人の集團的秩序に感心する船が如何に大きくあるともこれ丈けの人數を乘せる搭載力があるか知らんと取越し苦勞をする。そんな場合にまたも有色人種は乘船を拒まれるのではないか、若し拒まれたならば宿を何處に求むべきか、埠頭には宿らしい建物が無いが如何にすべきかとまたも心を惱ませる。一時間ばかりも長蛇の後方に加つて立ち暮らしてゐる、やがて可成大きな恰好のよい船が波を蹴立て黑煙を吐いて進んで來る。長蛇の陣は一齊に動き出した。瞬の間に甲板の上は立錐の餘地もない程に乘客で埋つて了つた。最初心配した程のことはなくて誰一人とり殘された者が無い。然し身動きもならぬ程の詰り方である。船は徐々に歩を進める。海の色山の景は今日迄の北藏の險嚴の鈍色とは全く異り晴やかで陽氣である。この大群衆はそもそも何處から來たか不審でならぬ。運河航行の乘客は僅少であつた。然るにこの一大群衆は何處から來り何處へ行くか、何事か既にあつたのか若しくは今から後にあるのか。疑問は疑問を產んだ。こんな疑問は田舍漢がはじめて大都會に旅行し往來に人出での多いのを見て「今日は何事かあるのか」と聞いて都會人に笑はれるのと等しい疑問ではある「聞くは一代の恥、知らぬは末代の恥」と寺小屋の老僧に文匣を前にして教へられたお藍で厚皮をきめこんで隣席否隣立の人に聞いて見る。隣人は四十前後の壯年紳士である。彼の說明は親切丁寧を極めて居る。蘇國の各都會は大小を問はず夏季には一定の日と日限とを定めて休業日としてゐる。日限は都會によつて一定してゐない。一週間の處もあれば數日の處もある。その間に各自が休暇をとつて旅行や避暑に出かける。各自の懷に應じて日數に差がある。英蘭と異つてゐる點は休暇の始まる日と終る日とが一定してゐることである。大都會になるとその大都會全部が同一の日と日限とをもつのでなくて、各區が別々に休暇の日を定めてゐる。その間に各自が隨意の休暇をとつて旅行に出かける。今日は休暇の最終の日であるから各地に出かけた者等が歸つて來たのである。隣人の說明によつてこの群衆の出來た所以が讀めた。公休日の制は日本にもある。公暇週は盆の藪入に相當する。東西軌を一にしてゐる處が面白い。今日までの旅行中汽車時間表や案內書に各都會の休暇日を書いてあるのに氣づかず、田舍の小都會に行つて見る可き處が閉鎖されてあるのに驚いてはじめてそれを覺ることが屢ある。

船はターバト(Tarbert)に寄港して愈が上に客を拾ふ。海岸に沿うて海峽に入る。兩岸の風景は恰も瀬戸内海に似て而かも山野の色悉く軟綠であり點綴するに赭色の瓦壁をもつてする。この海峽は避暑地として名高きカイルス・オヴ・ビュート(Kyles of Bute)である。ロッセイ(Rothesay)インネラン(Innellan)ダヌーン(Dunoon)グリーンノック(Greenock)の寄港地では多くの客を拾ひ上げてゐる。町には一見清く美しき家が立ち並んで居る。

自然の景色は美しく町の樣子も綺麗である。富豪の別莊町のやうに見えるこれ等の町に一目たりとも足を留めて見たいやうな心地がする。他かず眺めて居ると大聲に甲板に叫ぶ船員がある。收容人員超過だから後甲板上の船客の一部は他の船に乘り移れと云ふのである。誰一人も立ち去らない。すると船員は手近から强制的に移乘を强ひ出した。他國人たる自分は印度人等と共に追ひ出された。乘り移つた船は御話にならない程のお粗末な船であり客種もあまりよくない。甲板上に只獨佇んで海面を眺めて居ると、十數人の小供等が一段高き場處に集り一人の餓鬼大將の音頭の許に、チンチン・チヤイナマン・ワツワツワツと一齊に怒鳴り出す。小供等を避けて船室に歸るとまたも戸口まで追つかけて來て　チンチン、ワツワツワツと云ふ。勇を皷して再び甲板に立ち歸りベンチに腰を卸ろす。向ひのベンチに一人の小供を連れた婦人が居る。

余の顏を睨むが如く恐ろしき眼付きで眺めて居る。その小供も亦母親と共に怪訝な眼付きで余をじろ〳〵眺めて居る。母親は小供に向つて「黑ん坊に御用心」(Beware of the Dark)とあたりの人々に聞こえよがしに大聲で云ふ。その昔加藤高明子爵が倫敦に公使たる時一夕散歩に出かけた。すると物珍らしげに數十人の子供が背後からゾロゾロ隨いて來る。行けども行けども隨從して來る。高明子一策を想ひつき矢庭に後ろに振り向きステッキを振りあげて大喝一聲邦語でコラツーと叫んだ。小供等は蜘蛛の子を散らすが如くに四散したと云ふ。然し船上ではそんな眞似が出來ない。

不快げな余の樣子を見兼ねて一人の中年の男は小供等を制した後近づき來り例の如く戸籍調べを始めた。やがて小供等は鳴りを靜めて對談せる吾等兩人の周圍を圍繞し一言一句も聞き洩すまじとの顏付きをしてゐる。この機乘ずべしと相手の男に向つて日本人が外人に親切なること、教育が行屆いて居るので日本の兒童は外人にこんなことを決してしないことを說いた。相手の男は只々恐縮の體である。

船はグリーンノックを去つて後間も無く河を遡つてグラズゴ市に入る。兩岸に立ち並ぶ多くの船渠を裏から見物することになる。どのドックも空である。造船業者の不景氣を物語つて居るのである。相手の男は兩岸のドックを一々說明する。日本の軍艦汽船はどこのドックが多く請負ふとか支那のはどこ、還雜のはどこと云つた調子で悉く說明して吳れる。說明者の言葉にグラスゴ訛がありそれが倫敦訛に似て居るのに興味を覺えて傾聽する。船舶の說明の至れり盡せりは些か閉口

であつたが、そのお蔭で裏町に等しき都會の醜き裏面を長時間見せつけられる物憂さを忘れることが出來た。

【グラスゴ】エヂンバラ市に等しく見物に幾日を過ごす日が來た。大學がある。公園がある。博物館がある。郊外の町がある。寺院がある。如何にこの大都會の見物を短き期日にすますかはこれ亦旅人にとつて大問題である。居心地のよいホテルを見出すことが船中から既に心に懸る。船を棄てゝ先づ「大北行鐵道」(The Great Northern Railway) のステーション・ホテルに車を走らす。玄關子は室が空いてゐると云ふ。帳場の女は空いて居ないと云ふ。玄關子に聞いたと云へば、女は急に忙がはしげな樣子をし何を云つても、「ソリ」(Sorry) の一語を繰り返へすばかりである。このホテルに宿が無ければ他の宿を紹介して呉れと依頼する。それでも只一言「ソリ・ツ・メニ」(Sorry too many)と云つてとり合はないやむを得ず停車場の巡査に聞く。二三電話で問合はして呉れた「何れも滿員だ附近に「節制ホテル」(Temperance Hotel) があるがそれなら空部屋があるだらう」と云ふ。教へられるまゝに行く。入口が既にホテルらしくない。往來から直に狹い暗い階段を登るのである。余の來意を聞いた女中らしい婦人は部屋はあるが女將が不在だから暫く待て」と云ふ。時刻は早く移り行く。町の電燈に火がついてから既に時餘を經へてゐる。一縷の望をつないで物暗き一室で女將の歸りを待つてゐる。中々女將らしき者が姿を現はさない。一時間近くも待たされたが少しも出て來ない。然し壁に設けられた小窓から誰かが覗く樣子が度々する。止むを得ずその窓口から返事をうながす「女將がことわれと云ひました。理由はお前が煙草を吸ふので指先が汚れて居る。眞の節制家でないから」と女中は如何にも氣毒相に返事をする。禁酒禁煙の勵行には恐れ入つた。テムペランス・ホテルに止宿する資格が無いと云はれればそれ迄であるが、それなら一時間ばかりも待たして置く必要はないと無念がつたが仕方がない。

タクシイの運轉手に小錢をつかまして適當なる處に案内せよと命じた。他の鐵道の停車場であるセイント・イーノツクス・ステーション・ホテル (St Enock's Station Hotel) に案内された。こゝでは室があると云ふ。帳場で待つてゐると巡査が來て、余が携へて居た鞘付き蝙蝠傘の鞘を拂つて見せよと云ふ。兇器でなく蝙蝠傘であることを知つて「オーライト」と云ひ破顔一笑の後に立つた。グラスゴの宿で翻弄された憂目と「ソリ」の一語を繰り返へした帳場の婦人の顔は今日も猶眼前にちらついてゐる。

## 新刊紹介

### ○支那歴史地理研究續集

小川琢治著　昭和四年八月
弘文堂發行　定價五圓

小川博士は昨秋支那歴史地理研究初集を出たれが、今度こゝに續集を出版されて、其研究の成果を大成されたのである菊版六百頁の大册である、第一篇に北支那の先秦雜族を論じ逸周書王會の性質を明にし、春秋時代戎狄雜居の勢を明にせ